千葉市感染症発生動向調査情報

2020年 第42週（10/12-10/18）の発生は？

1　定点報告対象疾患（五類感染症）

上段：患者数
下段：定点当たりの患者数

「定点当たりの患者数」とは
報告患者数/報告定点数。

報告のあった定点数	42週	41週	40週	39週
小児科	18	18	18	18
眼科	5	5	5	5
ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞ	28	28	28	28
基幹定点	1	1	1	1

定点	感染症名	千葉市 注意報	10/12-10/18 42週	10/5-10/11 41週	9/28-10/4 40週	9/21-9/27 39週	千葉県 10/5-10/11 41週
小児科	RSウイルス感染症		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	1 0.01
	咽頭結膜熱		0 0.00	1 0.06	1 0.06	0 0.00	13 0.10
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		3 0.17	3 0.17	7 0.39	2 0.11	112 0.85
	感染性胃腸炎		27 1.50	29 1.61	27 1.50	26 1.44	188 1.42
	水痘		5 0.28	0 0.00	6 0.33	2 0.11	13 0.10
	手足口病		0 0.00	1 0.06	1 0.06	0 0.00	7 0.05
	伝染性紅斑		0 0.00	0 0.00	0 0.00	1 0.06	1 0.01
	突発性発しん	○	13 0.72	6 0.33	10 0.56	11 0.61	49 0.37
	ヘルパンギーナ		3 0.17	9 0.50	5 0.28	4 0.22	15 0.11
	流行性耳下腺炎		0 0.00	2 0.11	3 0.17	1 0.06	14 0.11
インフル	ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞ（高病原性鳥ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞを除く）		0 0.00	1 0.04	0 0.00	0 0.00	1 0.00
眼科	急性出血性結膜炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	流行性角結膜炎		2 0.40	0 0.00	0 0.00	0 0.00	8 0.24
基幹定点	細菌性髄膜炎 （髄膜炎菌性髄膜炎を除く）		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	無菌性髄膜炎		0 0.00	0 0.00	1 1.00	0 0.00	0 0.00
	マイコプラズマ肺炎		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	クラミジア肺炎 （オウム病を除く）		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
	感染性胃腸炎 （ロタウイルスに限る）		0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00

★★：流行中　★：やや流行中　◎：増加　○：やや増加　→：変化なし　↓：やや減少　↓↓：減少

2　全数報告対象疾患（63件）　※新型コロナウイルス感染症51件は数のみ

病名	性	年齢層	診断（検査）方法	病名	性	年齢層	診断（検査）方法
結核	男性	20歳代	IGRA検査等	腸管出血性大腸菌感染症	女性	50歳代	病原体の分離・同定及びベロ毒素の検出
結核	男性	50歳代	病原体遺伝子の検出等				
結核	男性	60歳代	髄液ADA値の上昇等	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	女性	60歳代	病原体の分離・同定、薬剤耐性の確認及び起因菌の判定
結核	男性	70歳代	病原体の分離・同定				
結核	男性	80歳代	病原体等の検出	梅毒	男性	50歳代	血清抗体の検出
結核	女性	50歳代	IGRA検査	梅毒	女性	20歳代	血清抗体の検出
結核	女性	90歳代	病原体等の検出	新型コロナウイルス感染症	男女	10歳代～80歳代	病原体遺伝子の検出等
レジオネラ症	男性	50歳代	病原体抗原の検出	－	－	－	－

・第42週は、　結核7件（130）、腸管出血性大腸菌感染症1件（19）、レジオネラ症1件（12）、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症1件（12）、梅毒2件（15）、新型コロナウイルス感染症51件（729）の発生届があった。

※　（）内は2020年の累積件数。但し、累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

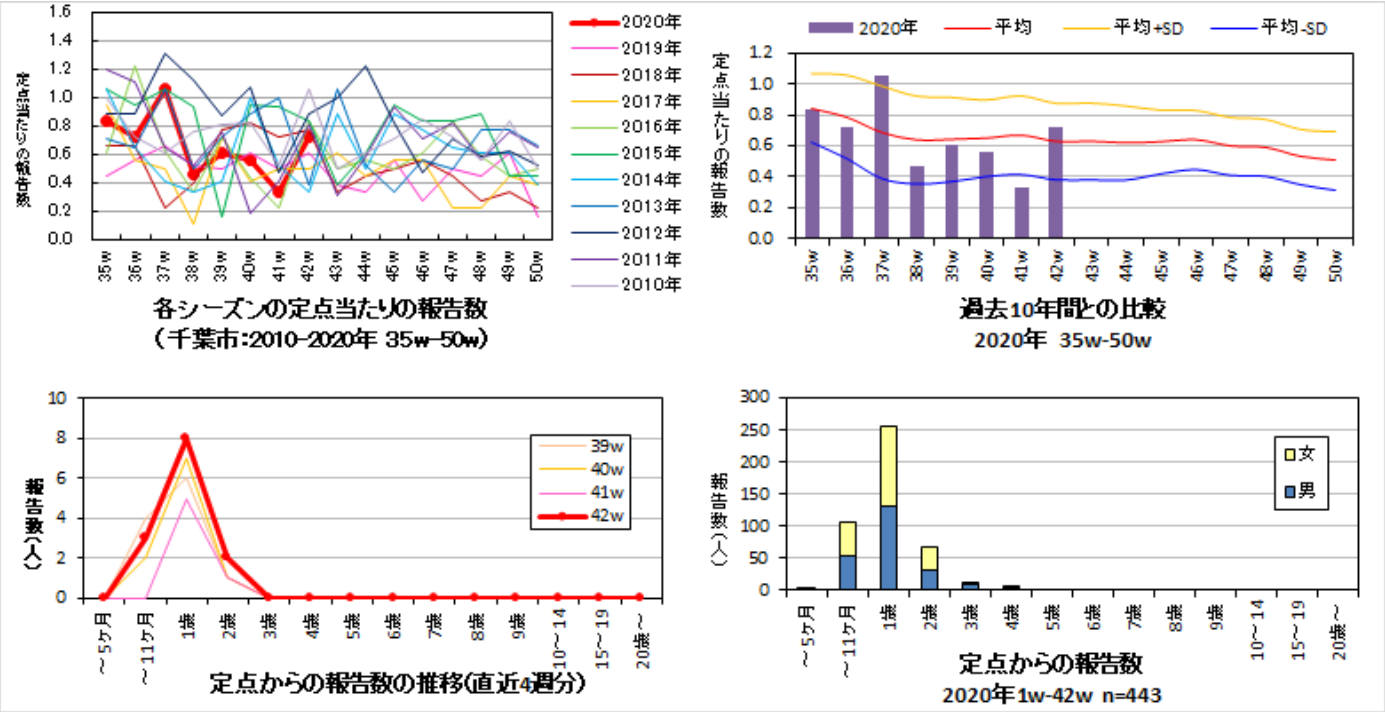
定点当たり報告数　第42週のコメント

過去10年の同時期と比べると、突発性発しん以外は全て平均未満か無しであった。

＜トピック＞

＜突発性発しん＞

全国の第41週の定点当たりの報告数は0.44で、過去10年の同時期と比べると少なくなっています。都道府県別では、宮崎県、福岡県、佐賀県の順で多くなっています。千葉県は0.37で全国レベルと比べると少なめとなっています。千葉市の第42週は前週より増加し0.72となり、過去10年の同時期と比べると多めとなりました。区別の発生状況は、稲毛区で最多で、同区の1歳で多く発生報告がありました。2020年第1週から第42週までの累積報告数は443件で、男性51.5%（228件）、女性48.5%（215件）となっています。年齢会階級別では、1歳（57.6%：255件）、6か月から11か月（23.7%：105件）、2歳（15.1%：67件）の順で多くなっています。



＜梅毒＞

第42週に2件の発生届があり、2020年の累積報告数は15件となりました。過去10年の同時期と比べるとほぼ平均レベルとなっています。全国レベルの第41週は、累積報告数が4412件で、過去10年の同時期と比べると多くなっています。都道府県別では、東京都（38）、神奈川県（20）、愛知県（19）の順で多く報告されています。千葉県（9）は全国第9位となっています。

梅毒は、性的な接触（他人の粘膜や皮膚と直接接触すること）などによってうつる感染症です。膣（ちつ）性交や肛門性交（アナルセックス）だけでなく、口腔（こうくう）性交（オーラルセックス）でも感染します。

原因は梅毒トレポネーマという病原菌で、世界中に広く分布しています。感染すると、経過した期間によって症状の出現する場所や内容が異なります。

・早期顕症梅毒　第Ⅰ期：感染後約3週間
初期には、感染がおきた部位（主に陰部、口唇部、口腔内、肛門等）にしこりができることがあります。また、股の付け根の部分（鼠径部）のリンパ節が腫れることもあります。痛みがないことも多く、治療をしなくても症状は自然に軽快しますが、体内から病原体がいなくなったわけではなく、他の人に移す可能性もあります。
・早期顕症梅毒　第Ⅱ期：感染後数か月
治療をしないで3か月以上を経過すると、病原体が血液によって全身に運ばれ、手のひら、足の裏、体全体にうっすらと赤い発疹が出ることがあります。小さなバラの花に似ていることから「バラ疹（ばらしん）」とよばれています。
発疹は治療をしなくても数週間以内に消えたり、あるいは再発を繰り返します。発しんが消えても、抗菌薬で治療しない限り病原菌である梅毒トレポネーマは体内に残っており、梅毒が治ったわけではありません。
・潜伏梅毒
症状がないまま何年も経過することがありますが、皮膚や内臓で病気は静かに進んでいます。
・晩期顕性梅毒：感染後数年
感染後、数年を経過すると、皮膚や筋肉、骨などにゴムのような腫瘍（ゴム腫）が発生することがあります。また、心臓、血管、脳、感覚器官などの複数の臓器に病変が生じ、場合によっては死亡に至ることもあります。
・先天梅毒
妊娠している人が梅毒に感染すると、胎盤を通して胎児に感染し、死産、早産、新生児死亡、奇形が起こることがあります。

千葉市では、2010年から2020年第42週までに194件の届出があり、2012年以降は増加傾向にあります。病型別では、2018年以降は無症状病原体保有者が半分以上を占めています（図1）。性別では、例年男性が多かったことに対し、2020年は第42週の時点で女性が多くなっています（図2）。年齢階級別では、20歳代31.4%（61件）、30歳代16.0%（31件）、40歳代15.5%（30件）の順に多くなっています。年齢中央値は、全体が38歳、男性が44.5歳、女性が26歳となっています（図3）。

病型別は、早期顕症梅毒（Ⅰ期）22.7%（44件）、早期顕症梅毒（Ⅱ期）30.4%（59件）、晩期顕症梅毒8.8%（17件）、先天梅毒0.5%（1件）、無症状病原体保有者37.6%（73件）となっており、晩期顕症梅毒17件のうち最も多い症状は神経症状（57.9%、11件）でした（図4）。

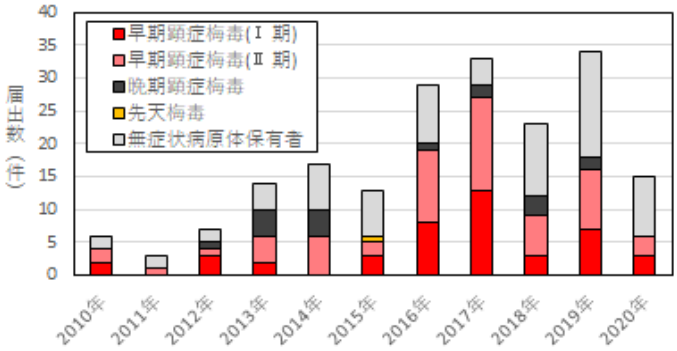


図1　梅毒　病型別届出数の推移

（2010年-2020年第42週　n=194）

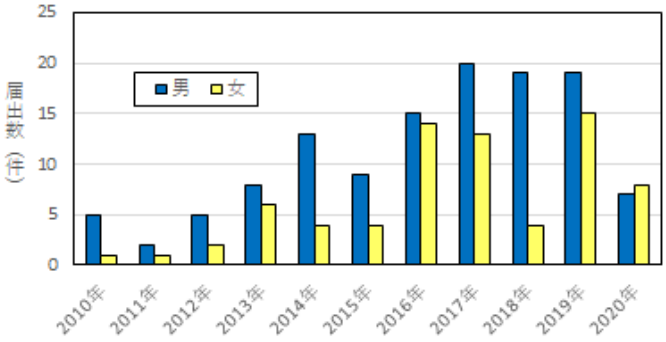


図2　梅毒　性別届出数の推移

（2010年-2020年第42週　n=194）

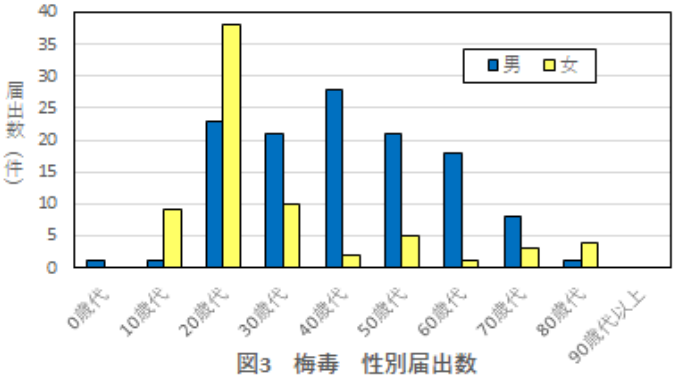


図3　梅毒　性別届出数

（2010年-2020年第42週　n=194）

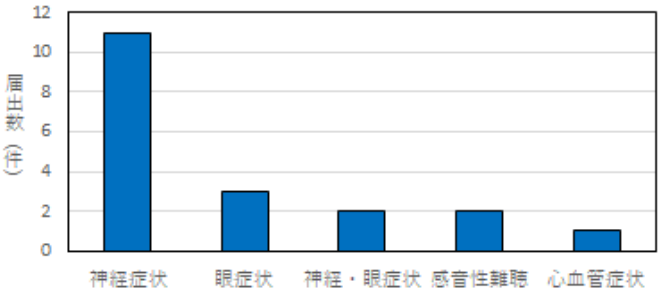


図4　梅毒　心血管・眼・神経症状・感音性難聴

（重複あり）

（2010年-2020年第42週　n=17）

早期の薬物治療で完治が可能ですが、菌を死滅させることはできても、臓器などに生じた障害を元に戻すことはできません。早期の治療が大切です。パートナーも検査を受け、感染していたら治療することが重要です。

また、症状がなく進行する場合もあるため、治ったことを確認しないで途中で治療をやめてしまわないようにすることが重要です。完治しても、感染を繰り返すことがあり、再感染の予防が必要です。なお、梅毒はHIVの感染リスクを高める可能性があります。

予防は、感染部位と粘膜や皮膚が直接接触をしないように、コンドームを使用することが勧められます。ただし、コンドームが覆わない部分の皮膚などでも感染がおこる可能性があるため、コンドームを使用しても、100%予防できると過信はせず、皮膚や粘膜に異常があった場合は性的な接触を控え、早めに医療機関を受診して相談しましょう。